

ダイバーシティ研修報告

アメリカにおける多文化教育に関する研究調査

戚 傑

2019年度のダイバーシティプログラム（宇都宮大学女性教員海外派遣）に採用され、アメリカへ派遣されて在外研究を行った。以下にその概要を報告する。

1. 在外研究の派遣期間と派遣先

派遣期間は2019年8月5日から2019年9月23日までの50日間で、派遣先はWarner School of Education, University of Rochester, USAである。

派遣先であるロチェスター大学は、ニューヨーク州北西部、五大湖のひとつであるオンタリオ湖のほとりにキャンパスを構える世界屈指の教育研究機関であり、医学、光学、音楽分野の評価が特に高い名門私立大学であり、ノーベル物理学賞を受賞された小柴昌俊先生が博士学位を取得した大学でもある。

学部教育における特徴的教育プログラムとして、「Take 5」がよく挙げられる。学業成績が優秀で学習意欲のある学生に、5年目の学費を免除して好きなことを自由に勉強できるようにしたプログラムである。このプログラムを利用すれば主専攻と異なる分野の勉強が可能になる。さらに、隣接しているロチェスター工科大学に著名な聴覚障害学コースが設置されていることもあり、バリアフリーな大学でもある。このようなキャンパス環境にあって、多種多様な教員や学生との交流が日常的にあり、アメリカ社会の多様性を肌で感じることができて、「社会の多様性」や「多文化教育」の在り方について常に考えさせられただけでなく、自分の研究テーマについての調査・研究を進める上でも、とてもいい刺激になった。

2. 研究の目的

今回の在外研究は、アメリカ社会で子育てをしている外国出身保護者の学力観・人間形成観を出身国別に比較・対照分析するものである。保護者の学力観・人間形成観が、子どもの発達・人間形成に及ぼす影響を明らかにすることができれば、日本社会における外国人児童・生徒への教育政策を議論する際に大変参考になると考えて始めた研究である。

3. 研究の方法

アメリカにおける学校教育制度、学力観・人間形成観に関する資料を収集整理し、その結果を踏まえて必要な社会調査の計画を作成し、予備調査を実施した。

調査対象とする外国出身保護者は、社会・教育システム、文化等において共通点と相違点が比較的明確かつ在米人数が多いアジア出身と南米出身者とした。なお、アメリカの先住民出身の保護者も比較群として調査の対象に加えた。

現在は予備調査の結果を分析しているところであり、これを踏まえて本調査の実施計画を作成し、2020年4月から実施する予定である。

4. 本年度の研究・調査活動に関する進捗状況

本研究は2020年度4月より本格にスタートする予定であるが、上記期間中に、以下の研究活動を行った。

①アメリカにおける学校教育制度、学力観・人間形成観の歴史および現状に関する資料の収集・分析を行い、予備調査計画を作成した。

②在米アジア人、南米人およびアメリカ人父兄の学力観・人間形成観に関する予備調査を実施した。

また、日本、中でも宇都宮大学における多文化教育研究の事情や自分の研究テーマ・研究成

果を積極的に紹介し、アメリカの研究者との研究情報の交換を熱心に行った。図1はホスト大学である、ロチェスター大学大学院教育学研究科で教員・院生を対象に行った講演会の案内である。

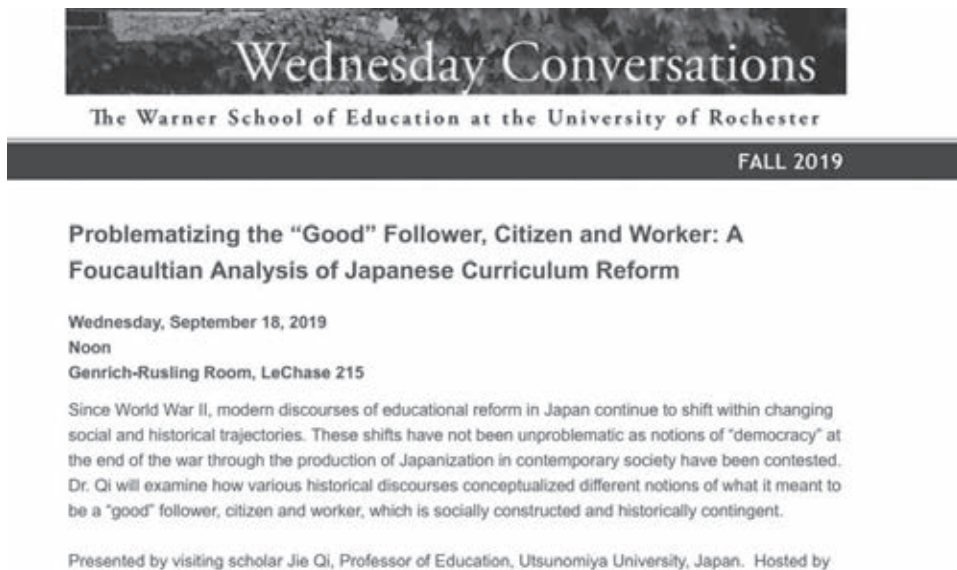


図1 ロチェスター大学大学院教育学科にて講演

5. まとめ

今回は50日という短い在外研究期間ではあったが、今回の在外研究調査で自分の目指している研究目標と研究方法に自信を深めることができ、次年度の在外研究を成功させるための準備を整えることができたと考えている。これからは、いっそう自らの研究を深め、もっと積極的に日本国内外に研究成果を発信していくつもりである。